

くまみる日和



つきととみるく





畳上の格闘技

みるくが転校してきた翌日の、まだ空が暗い早朝。窓の外には、街の灯りが残っていました。

つきとは、月影と札を囲んでいました。

「競技かるたって、どんな競技？」

月影は少し考えてから答えました。

「読手の声を聞き、読まれた札を相手より先に取り取る競技です。その一瞬のために、札の配置と戦況を読み続ける。頭も体も使います。私には——将棋とボクシングを、畳の上で同時にしているように思えます」



月影は、やりにくい

「バシッ！」

月影の手が、また一枚の札を払いました。

「また取られた」

「いまは、決まり字が変わっていました」

つきとが競技かるたを始めたのは、ほんの少し前です。練習相手は、月影だけでした。

「月影は、やりにくいんだよ」

つきとが口をとがらせると、月影は静かにうなずきました。

「それは、褒め言葉として受け取ります」



モデル・つきと

つきとは、小学生のころからモデルをしています。元モデルの母の仕事先で声をかけられたのが始まりでした。

元モデルの母、建築家の父、医大生の兄。街を見下ろす高層マンションでの暮らしは、写真にすれば誰もがうらやむように見えました。

大人たちは「才能がある」と言います。けれどつきとには、仕事の大人も同級生も、月影ほど上手に本音を隠せないことが分かっていました。

仕草や表情、声の間から、小さな違和感まで見えてしまうのです。

仕事場には、自分の立つ場所がありました。けれど学校では、何のためにそこにいるのか分からずにいました。



ちがう空気

休み時間。つきとのまわりには、今日も同級生が集まっていました。

けれど、つきとの視線は、その輪の向こうへ向いていました。

窓辺で話している、もなかとみるく。もなかは夢中で話し、みるくはまっすぐに聞いています。

お世辞も、誰かに見せるための笑顔ありません。

二人のまわりだけ、つきとの知っている学校とは、少し違う空気が流れているように見えました。



全部、覚えた

放課後。もなかは教室で、百人一首の本を広げていました。

「昨日貸した本、どこまで読んだ？」

「全部」

「全部って……百首、全部？」

「うん。決まり字も覚えたよ」

二人を見ていたつきとに、もなかが声をかけました。

「つきと君も、競技かるたをやるんでしょ。これから部室へ行くんだけど、一緒に来ない？」

「仕事があるから、部には入らないつもりなんだけど……」

「行こう！」

みるくのまっすぐな勢いに押され、つきとも二人についていくことになりました。



はじめての部室

もなかに案内され、三人は第二校舎二階のいちばん奥へ向かいましました。

みるくには二度目、つきとには初めての部室です。

「せっかくだから、二人で取ってみる？」

もなかがたずねると、みるくはうなずきました。

「やってみたい」

つきとも畳に座ります。月影以外との初めての勝負が始まろうとしていました。



一度見れば

「正式な試合は二十五枚ずつだけど、今日は十枚ずつにしよう」
つきとは、二人の前に札を並べました。読手は、もなかです。
みるくは並んだ札を、一度だけゆっくり見渡しました。

「覚えた」

「何を？」

「札の場所」

「もう？」

つきとは半信半疑のまま、みるくと向かい合いました。

「よろしくお願いします」

二人が頭を下げると、部室の中が静かになりました。



つきとの速さ

もなかが、最初の読み札を手に取りました。

「バシッ！」

歌が聞こえた瞬間、つきとの手が飛びます。

一枚。また一枚。

構えも、反応も、札を払う速さも、つきとのほうが上でした。月影との練習が、動きに表れています。

みるくの手は、ほんの少し遅れて札へ届きました。

「はやっ……！」

もなかが思わず目を丸くします。



札を探さない

けれど、試合が進むにつれて、みるくの手が札へ届き始めました。

みるくは、札の場所を探しません。

百首も、決まり字も、札の位置も、みるくの中にそのまま残っていました。

歌が聞こえると、迷わず手を伸ばします。

強く払うわけでもありません。構えも、まだ初心者のままです。

それなのに、一枚ずつ、札の差が縮まっていきました。



調子がくるう

「また、みるく……」

みるくは、つきとの動きをまねしません。表情も構えも、ほとんど変わりません。

次にどう動くのか、読もうとしても読めない。

つきとの調子が、少しずつ狂っていきます。

「なんだよ……。月影みたいに、やりづらい」

けれど、もなかには見えていました。学校で見かけたときよりも、つきとの目がずっと生き生きしていることが。



はちみつ色の運命戦

残った札は、おたがい一枚ずつ。運命戦です。

短い練習試合とはいえ、つきとは思っていませんでした。始めたばかりのみるくが、ここまでついてくるなんて。

二人が自分の陣の一枚を見つめ、次の歌を待ちます。

もなかが読み始めた、そのとき――。

みるくの記憶の中で、歌と決まり字と札の場所が、ひとつにつながりました。

みるくの体が、やわらかなはちみつ色の光に包まれます。

読まれたのは、みるくの陣に残った一枚。

光の中から伸びた手が、その札へ先に触れました。



まけた

しばらくの沈黙のあと、つきとは小さく息を吐きました。

「……まけた」

けれど、顔を上げて、みるくから返事はありません。みるくは正座したまま、こくり、こくり。そのまま眠っていました。

「百首は全部覚えられるのに、起きてはいられないんだ」

もなかは、少しあきれた顔です。

つきとは眠るみるくを見て、ふっと笑いました。

「次は、二十五枚でやろう。今度は負けないから」

「部には入らないんじゃないかったの？」

「仕事のない日なら、来てもいい？」

月影以外に、もう一度戦いたい相手ことができました。

次に学校へ来る日が、少し楽しみになりました。

奥付

くまみる日和

第3話「つきととみるく」

作・原案・構成

野山 あお

キャラクター・世界観設計

野山 あお

発行

くまみる工房

初版発行

2026年8月22日

© 2026 野山 あお

All Rights Reserved.

本作品の無断転載・複製・改変・再配布を禁じます。